

Assembly East 2017

Table No.2 総評

ジャッジ：永江（上智4）

順位

- 1位 橋本（明治3）
- 2位 古川（武蔵2）
- 3位 山田（慶應2）
- 4位 武藤（立教2）
- 5位 石田（武蔵2）
- 6位 久保田（立教2）
- 7位 宇佐美（武蔵3）

順位選定理由

- 1位 橋本（明治3）

他のメンバーの意見や質問、反論にしっかりと耳を傾け相手の意図を丁寧に聞き出す姿勢を持ちながらも、議論を前に進めるべくサジェスチョンを提示してメンバーを引っ張っていったオピニオンプレゼンターとしての振舞いを評価した。このテーブルにはアーギュメンターが多く、コンパリソンに到達するまでに時間がかかったが、各エリアでの皆の意見をけして雑に流すまいという意思が垣間見えるディスカッションであったように思う。反面、カンファメーションが不足気味だったのが原因で、引き出しまくった論点を片付けきれずに場が停滞したり、自身のサジェスチョンを浸透させられなかったという場面が散見されたので、議論の進行と高い傾聴力のバランスを考える必要があったと言わざるを得ない。また、武藤や山田のアイデアに対して本当に彼らの意図を汲めているのかあやしいスパイクプランを安易に採用したり、アーギュメンターのトリートに詰まってしまった際に、タスクを否定させる立証責任を脈絡なく押し付けたりという行動が目立ち、一貫したトリートが苦手な印象を受けた。いろいろと厳しいことを書いてしまったが、自身の信念に基づいて他人を尊重する姿勢は貴重なものだし、同大学の同期に家畜扱いを受けるなどの迫害に堪えながらも乙1を勝ち取れたのだから、今後も自信を持って邁進してくれるだろうと期待している。

- 2位 古川（武蔵2）

すべての会話に積極的に参入し、質問やロジックに対する自らの疑念をぶつけ続けたことを評価した。他人の反論に対してかぶせ気味に反論したり、それを確認したからといって何になるのかという質問やダウトを行き当たりばったりに飛ばしたりというあたりは改善の必要があるが、声も通るし（ちょっと大きすぎる気もするが

熱気があったのは大いによし)、紛糾した議論をなんとか自身の手で収束させようと様々なアプローチを試みるといったガッツもあるため、ケーススタディを重ねていけば冷静に発言できるようになるだろう。それと、臓器の違法入手ルートについてはもっとよく調べてからもってくる必要がある。

3位 山田（慶應2）

介入頻度にムラがあったものの、アーギュメントを複数回重ねていたことと、時折見られたカンファメーションのタイミングの良さおよびその精度を評価した。プレゼンも比較的簡潔でわかりやすい。特に、**practicability** における武藤の複雑なアーギュメントに対して、それを構成する要素を端的にまとめ皆への浸透を促したカンファメーションは秀逸であった。自身のアーギュメント検証時にほぼほぼアンサーマシーンと化してしまうのが玉に瑕だったので、自身のスタンスとオピニオンプレゼンターのスタンスを対照させながら検証の舵を切る練習をするといい。

4位 武藤（立教2）

自身の意見やダウトを、それに思い至った経緯を簡潔に付したうえで提示していたためテーブルへの浸透度が高い発言が目立った。また、それゆえにロジックの検証においては場の中心になることが多かった。プレゼンも上手。しかし、自身がアーギュメントを提示した **practicability** で他者からポンと投げられあっさりと受け入れたスパイクプラン（武藤のアーギュメントを解消する目的をもったもの。脳死者関係者の意思表示を無視するべきではないという武藤の意見に対し、「政府が脳死者に謝礼を与えればよい」というスパイクプラン）については、本当に自身のアイデアの着地点として妥当だったかどうか考え直してみるといいだろう。個人的には「ほんとにそれでいいのか」と疑問に思った。

5位 石田（武蔵2）

アーギュメントに対して複数人がトリートを失敗し焦りの雰囲気が出るなかでも、落ち着いてタスクに沿ったカンファメーションとダウトを主張していた。しかし、アーギュメントの論点を大局的にかつ克明にまとめるには至らず、リピカンとみなされるものも多かったがゆえにテーブルの中心になることができず、この順位となった。タスクを用いてトリートをする際は、タスクを持ち出すタイミングや、論点との兼ね合いを考慮する必要がある。ある程度は訓練で補えるので、トリートの型を作るところから始めるとよいと思われる。

6位 久保田（立教2）

中盤以降ほとんど介入が見られず、序盤の数少ない質問も単発で終わってしまったためこの順位となった。プレゼンに無駄がなく、視点も悪くないので、モチベーションがあれ

ばもっと積極的に議論に参入することをおすすめしたい。

7 位 宇佐美（武蔵3）

介入が見られなかった。テーブルに同大学が多く発言しづらい部分もあったかもしれないが、今回は積極的な後輩の姿を間近で見て感じるものもあったのではないだろうか。これから彼らの背中を後押しするべく、プレパや他活動で協力してあげてほしい。

議論の流れ

橋本がナローイングを読み上げ、山田、古川、武藤、橋本の4人がオピニオンプレゼンターに立候補。

山田：テーマは臓器移植。すべての脳死者に対して臓器提供を強制するマンドート。想定するコンパリソンは「DA TG が脳死者の家族、m/s を回避する方法の数如何によって m/s の度合いが異なる。」という QL コンパリソン。

古川：テーマは臓器移植。すべての脳死者に対して臓器提供を強制するマンドート。想定するコンパリソンは「DA TG が脳死者本人。AD TG である臓器移植を求める患者は〈回復の見込みが高い〉。また、〈自身の死の深刻さ/他者の死の深刻さ〉が m/s の tendency（上昇あるいは下降）にかかわる」とする QL コンパリソン。

武藤：テーマは臓器移植。すべての脳死者に対して臓器提供を強制するマンドート。想定するコンパリソンは「AD TG である臓器移植を求める患者は、死ねばすべてを失うことになる。一方、DA TG である脳死者は身体の一部を失うのみ。脳死者一人あたりから摘出できる臓器数は平均 4.5 個であるため、脳死者一人で AD TG を 4.5 人救える計算になる」というもの。

橋本：テーマは臓器移植。すべての脳死者に対して臓器提供を強制するマンドート。想定するコンパリソンは「AD TG である臓器移植を求める患者は現状のままでは命を失う。その一方、DA TG である脳死者は権利（ドナーになるかどうかの選択権など）を失うことになる。」というもの。

なお、オピニオンプレゼンター選出前の各オピニオンシートに対する質問は割愛する。また、便宜上、以降の議論の流れの表記には略語を使用する。

投票の結果、橋本はオピニオンプレゼンターに選出された。オピニオンシートの概要は下記に示す。

Problem: The number of organ is not enough.

Organ(def): without OT(organ transplant) we cannot live.

Kind of organ: 指定なし

山田の質問により、このエリアで言及されている organ とは「人間由来の臓器」のみを指し、いわゆる「人工臓器」は含まれないことが判明。

Harm: Patients s/m

Patients: people who have disease(この disease とは、臓器移植以外では治りえないもの)

s/m

situation) Patients cannot get OT

will) Patients want to get OT

reason of will) don't want to die because of the disease without OT

久保田の質問により、patients が臓器移植を必要とするような病にかかった原因は問わな
いことがわかった。つまり、ガンなど自然に罹ったものであろうと、事故による後遺症で
あろうとその病が臓器移植によってしか治らないものであるならば、その人は AD TG の範
疇内。また、武藤の質問で、OT による副作用や拒絶反応 (rejection) は AD に含まれず、
patients としてはひとまず OT の手術が達成できればよいとわかった。次いで、古川が臓器
移植のための臓器入手ルートについて質問。海外渡航やブラックマーケットから買い取る
方法もあるのではないかというダウトを含みつつ、それら他の臓器入手方法の存在や、そ
れらに対する patients のモチベーションをオピニオンプレゼンター橋本に問うた。橋本の
答えは「そのような闇市の類の存在は認めるが、今回の AD TG はその方法を使わない」と
のこと。

(※臓器の闇市や海外輸入にまつわる質問やスパイクプランはたびたび見られますが、そ
のどれもが実行可能性として眉唾物です。このテーブルに限った話ではないのですが (な
ので古川君と山田さんは落ち込まずに聞いてください)、仮にも法改正を議題にしているの
だから、ディスカッションに持ち込む話題についてのリサーチはきちんと行うのが持ち込
んだ人間の責任です。これを読んだみなさんは、ためしに「イスタンブール宣言」でググ
ってみてください。)

その後、古川から SOH に対する反論が提示された。「AD TG は OT のほかにも闇市や海
外渡航などの方法があるのだから、それで生きながらえればよい。だからその人たちはサ
ムカットしよう。また、ほかの方法があるにも関わらず OT に拘る人たちはある意味死を覚
悟しているということだから m/s していない」というもの。(あえて言うならここはロジッ
クを分けたほうがよかった) これに対して橋本の質問により、古川の言いたいことは「人
間由来の臓器を得るまでのつなぎとして人工臓器を広めていくのがベストな方法だ」とい
うことがわかったが、結局「この方法を用いることによる影響は m/s が完全になくせるこ
とではなく、m/s を減らせるという程度にとどまる」ということになり、古川の反論は流さ
れた。(古川と橋本はここで、古川の話をもとにその後どこで話せそうかということを決めておく
とよかった)

NFC

山田が反論。「Patients は例えば自ら募金などして海外に行って OT の手術を受けてくればいいため、それはもう J/G のタスクの範囲外のことである」というもの。

これに対して橋本が「NFC を否定したいのであれば、オピニオンプレゼンターのマンデートが **possibility to make situation better** できないということを証明せねばならない」と立証責任を提示した。その後山田自身が橋本に対して「J/G のタスクは〈J/G だけができること〉なのか〈J/G が解決できる可能性があること〉なのか」と問い、橋本が「J/G のタスクは後者と〈**make situation better for JN**〉だ」と答えたことにより、山田の反論は流された。

Mandate: makes a new law (force brain dead persons to offer their organs)

マンデートエリアでは、橋本のマンデートに対して古川が「医者による脳死判定テストの結果を J/G はチェックするのか、しないのであれば医者が罪悪感から脳死判定テストの結果を改竄できてしまう」と主張したことにより、橋本は〈J/G による脳死判定テスト結果確認〉をマンデートに追加。

Practicability

山田と武藤が反論。橋本がそれぞれの検証をじゃんけんで決めるよう指示し、厳正なじゃんけんの結果武藤の反論を第一に検証することに。内容は「脳死者は〈生きる権利〉、〈自由と幸福追求権〉を持っている。J/G は J/N（国民）の権利を侵害してはならないというエビデンスがあるため、マンデートは採択できない。」というもの。武藤の反論を構成する情報の多さにほかのメンバーが困惑するなか、山田が一つ一つの構成要素とエビデンスの概略を武藤に確認しながらカンファメーションしたことで、あらましは浸透した。概要は「マンデートは脳死者とその家族の意思表示（ドナーになるかどうかの）さえさせないものであり、これが上記の権利に反する」といったものであった。ここで、石田が「S.Q（現状）でもすでに、脳死者本人の意思が不明な場合でも家族の同意が得られれば臓器摘出できるようになっている。だからマンデートをとったとしても、少なくとも一方の意思確認をしないという点では現状と APA(マンデート採択後)で差がないではないか」と反論するも、武藤は「現状とマンデート採択後で、明確な意思表示システムの有無が変わる」と主張。結果、橋本は「マンデート採択後も〈脳死者とその家族の意思表示システム〉を廃止しない」と自らスパイクプランを打ち、さらに古川が「脳死者とその家族に対して、J/G が謝礼を払う」というスパイクプランを提案したところそれが通り、武藤のアイデアは DA で話されることになった。

次に、山田が反論。「脳死者とその家族はマンデートによって **dignity** を侵害されることになる。ふつうの倫理観で考えて、明らかに〈**dignity>life**〉なのだから **practicability** は成り立たない」という内容。まず橋本によって、〈**dignity>life**〉という考えが憲法や法に則ったものではなく山田の価値観に依拠していること、山田は自身の価値観として「少なく

とも脳死者が死ぬまでには彼らの **dignity** は保持される」という考えをもっていることが明らかになった。そして、「少なくとも脳死者が死ぬまでには彼らの **dignity** は保持される」という価値観を橋本が許容したため山田のアイデアはコンパリソンに流れ、ようやく **get AD** へ。

Gathering DA&Comparison

「DA TG は脳死者。Situation は‘have to give organ’, will は‘don’t want to give organ’」というアイデアを出した古川が DA プレゼンターに選出された。のち、橋本は「patientsのほうが脳死者よりも、病から回復する見込みがある」という **AD>DA** のコンパリソンアイデアを出す、検証途中で時間切れ。

おわりに

5 番テーブルのみなさんお疲れ様でした。上の議論の流れはある程度私の理解に基づいた記録に依拠しているので皆さんの理解とズレる部分があるかもしれませんが、そこはご寛恕ください。読んでいただいてもわかるように、「なんでここそうした…?」とか「権利の侵害の話なのにお金払えばすむの?」とか、ツッコミどころの多い議論であったことには間違いありません。これからトリートメントを練習するにしろアーギュメントを極めるにしろ、少なくとも自分が「まあいいかな」と思えるような流され方をできるように、あるいはそう思ってもらえるような流し方ができるように練習してください。あれだと論理性や妥当性でサジェスションやスパイクプランを通したとはいえませんが。ほとんどのいたんの笑顔やふるだいの熱気で通ったと言っても過言ではないのです。時にはそういうのも必要ですが、ある程度の妥当性を確保した上でアトモス勝負に踏み切ってください。

とはいえ、なかなか白熱した元気なテーブルを見られてよかったです。3 年生のみなさん、最期の試合が幕を閉じましたね。春セミにつづき、メンタルが傷だらけになるような過酷な月日をアッセン期も過ごし、悔しい思いに打ちひしがれる時もあったでしょうが、最期まで自分の出来ることを模索する姿勢が見て取れました。きっとあなたたちの後輩もその背中を見ていたと思うし、これからも見ることでしょう。だから、あれがあなたたちのあの時できる最高のパフォーマンスだったとしても、引退したからといってすぐ自分の成長から目を背けることはせずに、さらなる実力を研鑽してってください。引退した後だからふと思いつくこと、我に返ることというのはあるものです。それを一身に受け止めながら自分のものにしていき、これから入ってくる一年生やいまの 2 年生に享受してあげてください。

2 年生のみなさんも、多少荒削りではありましたが、3 年生などおかまいなしに積極的に自身の意見を主張していたガッツは評価に値します。このテーブルは元気な 2 年生が多かったので、「甲に食い込んでやる」だとか「乙 1 をとるぞ」だとか、そういう野望を持っている人もいたかもしれません。ただ、ランクを目指して悔しがる先輩や同期を見てそれが

そんなに甘いことではないと知ることもあったのではないのでしょうか。あなたたちには、もう 2 回チャンスがあります。それが最後のチャンスになってしまいますから、今の内からその日を見据えて邁進してください。そうすればきっといい結果が出せると思います。今年呑んだ自身の涙と先輩の涙を受け止めて、いいプレイヤーになってくれることを願います。